

『太平記』第二部世界にこめられた政治的意図

——武家の棟梁抗争譚創出の理由——

和田 琢 磨

一、はじめに

鎌倉幕府倒壊の後、後醍醐天皇を中心とした建武政権が誕生した。『太平記』では巻十二にその誕生と綻びが描かれ、以降、同政権の崩壊から足利政権誕生への過程が語られている。この部分を『太平記』第二部という。第二部の範圍を何処までにするかという点については諸説あるものの、足利尊氏と新田義貞による二人の武家の棟梁の対立が中心話題であり、尊氏の権力確立の道程を描いているという見解では一致している。⁽¹⁾これは首肯すべき説と考えるが、ここには一つの大きな問題が含まれている。『太平記』では二人ともに「武家の棟梁」として位置付けられているものの、当時の資料を検討すると、実際の義貞は無名の存在であり、武家の棟梁として尊氏と唯一対抗し得る人物であるとする『太平記』の義貞像は、全くの虚像であると考えられるのだ。⁽²⁾

南北朝期の足利氏は未だその地位が絶対的ではなく、武家の棟梁となり得る他の源氏諸氏に相対化されてしまう危険性が残され

ていたという。この事態を打破すべく、足利氏は自家の権威確立のための活動を行っていたが、『難太平記』が伝えるところの、尊氏の弟直義が関与した『太平記』(初期形態本)⁽³⁾の制作作業は、まさにこの時期に行われたものであった。そして、現存の『太平記』では、足利政権誕生を語る中心部にその開祖のライバルがわざわざ創出されているのである。いわば、現存本は、初期形態本が成立した頃の足利氏にとってのタブーをあえて描いている事になるのである。その理由は何か。それが足利氏の権威確立を語っている文脈中である以上、そこに何の計算もされていなかったとは考えにくい。そうした文脈中で、この義貞像は如何に機能しているのか。その機能が初期本に存在していたとしても不自然ではないものなのか、一考の余地があるように思われる。

右の問題を考える際、次の指摘を紹介しておく必要があるだろう。それは、尊氏と義貞の棟梁権をめぐる争いの物語は、後醍醐(天皇)⁽⁴⁾と尊氏の対立が正面から描かれる事を回避させる性格を有しているというものである。(天皇)⁽⁵⁾は武家政権の正当性を社

会的に認めさせる上で、武家の政權獲得者にとつて必須の存在であつたが、この「天皇」と尊氏との対立の叙述を回避させようとする指向が『太平記』には認められ、義貞像もその一部として機能しているというのである。この指摘は非常に重要なものであるが、果たして義貞像の役割はこれだけなのだろうか。南北朝から室町初期にかけての、足利氏による政治宣伝工作という視点を考慮に入れつつ、義貞像の検討を通して二人の武家の棟梁の物語が創られた理由を考察してみたい。

二、「綸旨の文章」の令旨考

義貞の登場は巻七「新田義貞賜綸旨事」からである。その冒頭には「新田小太郎義貞と申は、八幡太郎義家に十七代の後胤、源家嫡流の名家なり」という語り手による紹介がある。そして、それに続き義貞は「義貞不肖なりといへども、門楣として譜代弓箭の名をけがせり」と、語り手の紹介と同様に自ら源氏の「門楣」、すなわち棟梁である事を口にしており、『太平記』における義貞の位置が強調されているのである。一方、尊氏も「我は源家累葉の貴族なり、王氏をいで、遠からず」(巻九「足利殿御上落事」という意識を有した人物として登場している。

このように、二人は作中においては同じ棟梁として位置付けられているものの、現実における尊氏と義貞の格の違いについては、作者も十分に認識していたようである。それは、義貞には、彼が源氏重代の銘刀「鬼切・鬼丸」を所持していたとするなど、源氏の棟梁たる事をあえて強調する表現が散見されたり、義貞自

身の勇将・名将たる姿がことさら語られ、さらに、彼の下には様々な超人的能力を備えた武将が従っていたとし、大将・家来の活躍が印象的に描かれている事などから判ぜられるのである。こういった趣向は尊氏方の描写には認められないが、それは作者が新田眞員であるからというよりも、棟梁・武将である事を強調しなくては、尊氏と対峙すべき人物として形象でできなかったからであらうと推測される。『難太平記』の「宮方深重」という表現が南朝との具体的関係性を示すものではなく、作者了俊のレトリックであると考えられる以上、『太平記』と新田氏・南朝方との関係を示す資料は皆無である。また、足利氏に対する直接的な批判が殆どされていない事実や、尊氏と「天皇」の対立を避けようとする配慮が認められる事などからしても、作者が南朝・新田寄りの人物であつたとは考えにくい。登場時に、義貞が武家の棟梁であるとする説明が、尊氏に比べて強調されているのも作者のこの構想と関わつていよう。

義貞像形象に対する右の作者の姿勢を踏まえると、義貞が倒幕を決意する際に大塔宮の令旨を求めたところ「綸旨の文章」の令旨が届けられたという部分(巻七「新田義貞賜綸旨事」が問題になつてくる。この文書は、『太平記秘伝理尽鈔』(室町末・近世初期に成立)以来問題とされているが、現在でも大塔宮が綸旨を出した実際の例は確認されておらず、他に類例もないという⁽¹⁰⁾。したがつて、現時点では、ここは『太平記』の表現の問題として考察するのが最良であると考ええる。鈴木登美恵氏の「義貞をめぐる虚構の一端として、興味深い問題を含んでいる」という発言は重要

であると考えて、これを受けた論考は出されていないようである。そこで、『太平記』の読みの一環として、まず、この問題に取り組んでみる事にしよう。

義貞は令旨を入手したいと執事船田入道に相談した。すると、船田入道は三十人程で合戦の真似をし、後醍醐方の援護をしようとして近づいて来た大塔宮に仕える野武士を十一人捕らえた。船田は人質を手元に置きながら一人を宮の許に遣わし、後醍醐に与力するためには大塔宮の令旨が必要であるという義貞の意向を伝えた。次の日に宮の令旨を携えた野武士が帰ってきたのであるが、問題となる部分を左に引用しよう。

(大塔宮の手下が：私注) 一日ありて令旨をさ、げて来れり、
開てこれを見に、令旨には非で綸旨の文章に被書たり、其詞
には、

綸言ヲカウムリテ称ク、化ヲ敷キ万国ヲ理トスルハ、明
君徳也、乱ヲ撥^ハ四海ヲ鎮ハ武臣節也、傾年ノ際、高時法
師^ハ一類、朝憲ヲ蔑如^ヘ、恣ニ逆威ヲ振テ、積惡ノ至、天誅
已ニ顕タリ、爰ニ累年宸襟ヲ休メタマツランガ為、将
ニ一挙ノ義兵ヲ起サントス、奮感尤^モ深シ、抽賞何ゾ浅ラ
ン、早ク関東征罰ノ策ヲ運シ、天下静謐ノ功ヲ致スベシ
者、綸旨如此、仍執達如件

元弘三年二月十一日

新田小太郎殿

左少将

とぞ被書たる、綸旨の文章、家の眉目に備ふべき綸言なれば、義貞不斜に悦て、其翌日より虚病して急ぎ本国へぞ被下

ける、

傍線部・太字部から、この令旨に綸旨的要素が含まれている事が容易に見て取れよう。ここで、現在の代表的な説¹³であると思われる鈴木登美恵氏の指摘を確認し、問題の所在を更にクリアーにしておこう。鈴木氏は、義貞がこの時期に後醍醐天皇の綸旨を入手する事が不可能であつたという事を論じた上で、この綸旨は内容からして義貞の申し出を受けた上で作成された偽綸旨で、「義貞も、偽造綸旨であることを諒解した上で、令旨をいただく以上の名譽であると喜んで拝受したのであると、読み取れる」と述べている。この発言には傾聴すべき点も多く含まれているが、以下の如き問題も孕んでいると考える。まず、現実には存在しない可能性が高い偽綸旨を、義貞が喜んだとする理解は可能かという疑問が残る。次に、後醍醐の隠岐配流中、大塔宮の令旨を受けた人物として赤松円心(巻六)がおり、義貞自身も普通の令旨を望んでいた。つまり、大塔宮の令旨でも挙兵理由としては十分に機能していたのである。したがって、問題は、なぜ棟梁義貞に「綸旨の文章」の令旨が与えられたのか、という所にあると考える。尊氏像との関係から考察する必要があるのではなからうか。

そこで、義貞像形象と相对関係にあるライバルに目を移すと、尊氏は後醍醐の綸旨を手に入れていた(巻九)。後醍醐は隠岐脱出以降、綸旨を幾度も発給しており、義貞と同じ金剛山を攻撃していた人物さえも綸旨を入手している(巻十一「金剛山寄手被誅事¹⁴」)。綸旨と令旨の違いは、挙兵に保証を与える性格という点では共通していても、後醍醐との距離に関しては異なった印象

を与えただろう。そうだとすれば、そこには、「繪旨の文章」の体裁をとった令旨とした理由が隠されているのではないか。この章段名が、「新田義貞賜繪旨事」となっている事からも、作者が義貞と後醍醐の関係を密に構築しようとした意図が想像され、これ以降、「去三月十一日、先朝より繪旨を被成たりければ」(語り手)「^{さだた}先て繪旨を給りしは、何の爲の御用ぞや、^{さだた}宣旨を額に当て(脇屋義助)「先宣旨を披て三度はを拝し」(義貞)「勅定に依て大儀を欲立る、」(大井田遠江守。以上、卷十「新田義貞謀叛之事」^{天狗傳後事})「義貞賜^テ朝敵追伐之繪旨」(義貞。卷十四「新田足利確執事」^{義貞})等、義貞が後醍醐の繪旨を得たとする「太平記」の叙述を踏まえると、義貞像に大塔宮の「令旨」ではなく、後醍醐の「繪旨」を与えたという事実を創り出そうとする作者の姿勢が見えてくる。「繪旨の文章」の令旨も義貞と後醍醐の関係を構築する文脈の一環で、後に繪旨に置き換えるための用意だったと考えるのである。宮から受けた文書に記された二月の日付を、後醍醐の隠岐脱出後の三月(傍線部)としているのも意図的な改変だろう。

では、作者はなぜこのような構想の痕跡を残してしまったのだろうか。後醍醐との関係を示したいのであれば、虚構を以て繪旨を手に入れたとする叙述も出来たはずである。それは、単なるミスという事も考えられよう。だが、「太平記」の中で比較的完成度の高い第一部で、しかも尊氏のライバルとして以降の作品世界を担っていく義貞の登場場面において、あからさまに痕跡を残しているのは不自然である。『太平記秘伝理尽鈔』でもこの文書は

問題にされており、少なくとも近世の人はすぐに気が付くほどの不自然な文書であった事を勘案すれば、むしろ、ここにはわざと二人の差を示そうとした作者の意図があるとは考えられないだろうか。先に、義貞像には武家の棟梁である事をあえて強調する表現が散見されると述べたが、尊氏像の場合には頼朝と重なる表現が数箇所ある。義貞と頼朝をつなげる表現は認められず、二人の差をさりげなく、しかし厳然と示しているのである。倒幕の挙兵時に、尊氏には八幡大菩薩の使者たる鳩の奇瑞が認められたが、義貞の場合は天狗であったとするのもこれと同様であろう。こういった例を踏まえると、この不審な令旨にも、同じ棟梁としながらも尊氏の優位性を伝えようとする作者の思惑がこめられていて、二人の立場の違いを示していると考えられるのである。この令旨からは、義貞を尊氏と並ぶ棟梁としつつも尊氏との差をちらつかせるという、義貞像形象に関する作者の構想の二面性が見て取れるのである。

それでは、作者は具体的にどのようにして、棟梁義貞像を形象し、棟梁の抗争譚を創出したのだろうか。節を改め考えていく事にしよう。

三、二人の武家の棟梁の抗争譚の始発 ——「天下の武將」義貞像の誕生——

登場時のイメージ通り、棟梁義貞は平氏として位置付けられている北条一族を討ち、鎌倉幕府の歴史に終止符を打った。「両六波羅をば貴落といへども、関東を賣られむ事は優々しき大事」

（巻十一）「書写山行幸事蹟」・後醍醐の言辭」と考えられていた鎌倉を陥落させた彼の功績は絶大だったといえよう。稲村ヶ崎で太刀を奉納し龍神に祈願したところ、俄に鎌倉への道が開けたとする場面などからは、棟梁義貞が特別な存在として位置付けられている事が感得される。が、彼の名は以降巻十四まで殆ど見られなくなってしまう。

義貞が再び脚光を浴びるようになるのは、尊氏討伐のため派遣される事となった後醍醐軍の武將に就任してからであるが（巻十四「節度使下向事」、そこには次のように記されている。

大將軍新田左兵衛督義貞都を立たまふ、元弘の初に、此人指の大敵をはろほして、忠功人を超たりしかども、尊氏卿君に咫尺たまひしに依て、抽賞其迄も無かりしが、陰徳終に顕て、今天下の武將に備はり給ければ、当家も他家も、今は偏執の心をうしなつて、此手に不属といふ者なし

傍線部の如く後醍醐へ天皇への保証を得た義貞には多くの兵が付いたという。ここで注意したいのは、「今は」という表現である。へ天皇への保証を獲得する以前は、義貞には兵が従わなかった事が仄めかされていよう。一門の他、佐々木道誉などの大名までもが従っていた尊氏と対抗するには、後醍醐へ天皇への存在なしでは何も始まらなかったのである。

ところで、義貞の前は大塔宮が後醍醐方「武」の中心であった。この後醍醐方の「武」の中心である二人には、何かしらの共通点や通底するものが認められるのだろうか。「天下の武將」の性格を掴むために、まずはこの点を確認する必要があると考える

が、二人の関係を整理すると次のようにまとめられる。①二人共に、宮方の「武」の中心人物であった。②尊氏の対立者である。そして、大塔宮の死後、宮に代わって義貞が尊氏との対立者として描かれ始める。つまり、大塔宮の①②の性格を継承した人物として、棟梁義貞は「太平記」に再び登場しているのである。

さらに、二人の関係は、尊氏批判の視点の等質性にも認められる。尊氏の討伐を後醍醐に申し出た場面で、大塔宮は「足利治部大輔高氏、纔に一戦の功をもて、万人の上に立むとす」（巻十二「公家御一統事蹟」）と批判し、義貞は奏状において「天討命ヲ革ムルノ日、忽ニ鵜蚌ノ弊ニ乗リ、快ク狼狽ノ行ヲ為ス」（巻十四「新田足利確執事蹟」）と、幕府方の敗北が決定的になつて初めて、尊氏は加担したと主張している。両者ともに、尊氏は僅かに一戦にしか参戦していないと批判しているのである。この指摘は、実戦面においては正鵠を射ているが、ここで問題なのは、作中、この批判の視点が義貞と大塔宮の二人にしか認められないという点である。「太平記」における二人の深い繋がりが感じられよう。

この他にも、巻十四に置かれた義貞の奏状からは宮と義貞を結び付ける幾つかの線を見出す事が出来る。以前、私は尊氏と義貞の奏状合戦について検討したが、この奏状合戦は二人の争いの端緒と位置付けられ、そこで義貞は勝利を収め後醍醐へ天皇への武將となったのである。義貞は尊氏の不忠を具体的に八例挙げて非難していたが、そのうち五例が親王に関するものであり、うち四例が大塔宮に関するものであった。前稿では尊氏側の視点に立脚

したため論ぜられなかった点も多いので、以下に義貞の奏状を一部検討しておこう（丸数字は義貞が挙げた具体例の順番である。⑤の引用は紙幅の都合上省略した）。

③仲時・々益敗北ノ後、尊氏朝臣未ダ勅許セラレザルニ、自ラ帝都ノ法禁ヲ專シテ、親王（大塔宮）ノ卒伍ヲ誅シ奉ル、司リニアズシテ法ヲ行フ其ノ咎洩カラズ、

④兵革ノ後蛮夷未ダ心ニ服セズ、本枝根ヲ堅セザルノ間、竹苑（成良親王）ヲ東関ニ下シ奉リ、已ニ塞外ニ柳營セシムルノ

処、尊氏超涯ノ皇沢ニ誇リ、トモニ僧上ニ立ント欲ス、札ヲ犯スノ科、遁ント為ニ処ナシ、

⑥天運ノ循環往テ還ラザルハ無シ、成敗一統ニ帰シ、教化万葉ニ伝ルコト、偏ニ兵部卿親王ノ智謀ヨリ出タリ、シカルヲ、尊氏已ニ種々ノ讒ヲ構テ、遂ニ流刑ニ陥イレ奉リ畢ンヌ、和議ノ暴逆誰カコレヲ惡マザラン、

⑦親王（大塔宮）贖刑ノ事、修リヲ押テ正ニ帰セントスルノミ、武丁桐宮ニ放ツ、コレ豈ニ其ノ謂ニアラザランヤ、シカルヲ尊氏、釘、宿意ヲ公議ノ外ニ仮テ、尊体ヲ圉ノ中ニ苦メ奉ル、是ヲモ忍ズベクンバ、イツレヲカ忍ズベカラザランヤ、

⑧直義朝臣相模次郎ガ軍旅ニ劫カサレ、戦ハズシテ鎌倉ヲ退クノ時、竊ニ兵ヲ遣テ兵部卿親王ヲ誅シ奉ル、其心偏ニ将ニ国ヲ傾ントスルニアリ、此事隠テ未ダ報聞ニ達セズ、世人知ル所遍界何ゾ蔵サン、

問題となる箇所は傍線・太字で強調したが、③⑥⑦⑧は大塔宮

について、④は成良親王について言及している。大塔宮関連の四項目の記事は、内容的に③と⑥⑦⑧に分けられ、前者は大塔宮と尊氏の対立の発端となった事件について、後者は二人の対立の終息部、大塔宮殺害につながった一連の事件について述べたものである。このような大枠を踏まえた上で、奏状の構成を具体的に分析してみよう。

③は六波羅探題滅亡直後の五月の事で、卷十二「兵部卿親王囚事」に記されている。④は成良親王が征夷將軍として鎌倉に下向しているにもかかわらず、尊氏が征夷將軍の任を要求したことを批判しており、卷十三「前代蜂起事」「高氏卿関東下向事」にその根拠が求められる。また、引用はしていないが、⑤は中先代の乱鎮定に向かう際の尊氏の関東八箇国の管領の要求と、乱後の尊氏の支配態度を批判したもので、卷十三「高氏卿関東下向事」に記されている。⑥⑦⑧は時間的に重なるが、基本的に③④⑤は時間の流れに沿って配列されているといえる。だが、⑥⑦は卷十二「兵部卿親王囚事」に、⑧は卷十三「兵部卿親王薨事」に記されており、本来ならば前者は③の後に、後者は④の卷十三「前代蜂起事」と「高氏卿関東下向事」の間に位置するものである。鎌倉での宮の様子を伝える⑥⑧は、時間順に配列された③④⑤とは異なり、最後に置かれ強調されている事が理解されよう。

次に奏状の内容に踏み込んでおこう。大塔宮関連記事は、「太平記」の記事とはほぼ一致する⑥⑧と、義貞独自の視点と考えら

れる③と⑦の波線部の二つに分類できる。特に、後者に問題が端的に示されているので、③と⑦の波線部について考えてみたい。巻十二「兵部卿親王囚事讞」から、③について記されている箇所を引用する。

抑高氏卿、今までは随分忠ある人にて、過分の僻事有りとも聞へざるに、何事によつて兵部卿親王は、是程に御憤は深かりけるぞと、事の根源をたづぬれば、去年五月に官軍六波羅を責落たりし刻、殿法印の手者共、京中の土倉を打破り、屋内の財宝を運取ける間、狼藉をしづめん為に、足利殿よりこれを召捕て、廿余人六条河原に切掛られる、(中略)殿法印此事をき、て安からぬ事に被思ければ、様々に讒言をかまへ方便をめぐらして、兵部卿親王にぞ訴申されける、彼様の事共重疊して上聞に達ければ、宮も憤欲て、信貴に御座ありし時より、高氏卿を討ばやと連々に欲立……

傍線部には、尊氏が「殿法印の手者共」を罰した事が語られている。これが宮と尊氏の対立原因であるわけだが、ここでは「狼藉」を行った殿法印良忠の手下が批判の対象となっている。そして、尊氏を逆恨みした良忠が大塔宮に重ねて「讒言」したために(二重傍線部)、親王は尊氏を討つことを思い立ったのである。尊氏には非がなく、語り手は彼の「忠」を認め、攻撃しようとする宮に対して疑問を呈してさえいる(波線部)。奏状における義貞の「司リニアラズシテ法ヲ行フ其ノ咎淺カラズ」とする批判は、護良親王側に立った好意的な視点であり、「殿法印の手者共」をわざわざ「親王ノ卒伍」と表現しているところには、大塔宮と尊氏

の対立を強調しようとする義貞の意識が認められよう。

同様に⑦の波線部を検討すると、大塔宮が罪を償おうとしている姿勢を、驕りを禁じて正道に戻そうとするためという解釈を加えているが、この考え方は「太平記」の他箇所には認められないものである。やはり、⑦でも、義貞は大塔宮を独自の視点から好意的に捉えているといえよう。義貞の奏状は、当人独自の視点から大塔宮を好意的に評し、宮と尊氏の対立を強調する性格を有しているのである。

義貞はこの奏状提出後、大塔宮の跡を継いで「天下の武將」に就いた。この流れを踏まえれば彼の意図が見えてくるだろう。義貞は宮の地位を継承するために、尊氏と護良の対立を強調し、好意的言辞を連ねたのである。大塔宮が後醍醐に忠誠心を抱いていた人物であったとすれば、当然、宮の対立者である尊氏は不忠の者という事になる。こうして作者は、尊氏討伐と親王に代わる「武」の中心人物の必要性を強調し、その役目を義貞に担わせようとしたのではないか。大塔宮の死を義貞がいち早く伝え、その情報「尊氏・直義等罪責通がたし」という判断を導き、義貞に尊氏討伐の宣旨をもたらしたのである。義貞はこうなる事を十分に知っていたに違いない文脈が、作者によって作られている。このようにして、源氏の棟梁として朝家を守るといふ義貞の役目は、尊氏を討つという意味になっていき、後醍醐と尊氏の対立は、義貞と尊氏との棟梁の戦いの物語に転換されていったのである。

右のように、義貞にとって後醍醐(天皇)は必須の存在であつ

たが、それでは、後醍醐にとつて義貞は如何なる存在であつたのか。そして、武家政権を保証する機能を有する（天皇）と二人の棟梁の關係に違いはなかつたのか。次に考えてみよう。

四、〈天皇〉と二人の棟梁の位相差

最初に、尊氏と対比しつつ後醍醐に対する義貞の想いを確認しておこう。

義貞は「古より源平両家朝家につかへて、平氏世をみだる時は源家之をしづめ、源氏上をおかす時は平家之をおさむ」という棟梁としての義務感から後醍醐を救う決意をしている（巻七「新田義貞賜諭旨事」）。その後も、「義貞今臣たる道を尽さん為に、扶鉞（タテマツ）を把て敵陣に莅（タ）む、其志偏に王化を助奉り、蒼生を令（タ）安するに有り」（巻十「稲村崎成干渴之事（付録義貞之事）」）と述べており、北国へ没落する直前の祈願からも忠誠心しか読み取れない（巻十七「義貞没落事」）。義貞は後醍醐に対する強い忠誠心を一貫して持っていた。それに対し尊氏の場合は、源氏の臣である北条の「君臣の義」に反する態度に怒り、「一家をつくして上洛して先帝の寄にまひりて、六波羅を責落し家の安否を定べき者を」（巻九「足利殿御上洛事」）と、後醍醐を救うという目的の他に、北条氏を誅めようとする主家としての目的が、換言すれば、源氏の棟梁として臣下たる平家を討とうとする意志が示されており、中先代の乱鎮定に向かう際にも、後醍醐に対して「征夷將軍の任は、代々源平の輩功によつて其位に居する例勝（あけて）計べからず、此一事殊に朝のため家のため望深き処なり」（巻十三「高氏卿聞東下向事（附録）」）と、

はつきりと自家の願望を口にしてゐる。征夷大將軍就任は、「家の安否を定」めようと挙兵した尊氏の最終目標であつた事はいうまでもない。このように彼の言動を追っていくと、そこには平氏（北条）に代わり源家を再興させようとする意志が散見され、後醍醐の臣という立場を口にしてゐる場面も皆無ではないが、義貞が抱いていたような、皇室に対する源氏の棟梁としての一途といつてもいい義務感は認められないのである。

当然、この両者の意識差は（天皇）との關係にも表れてゐる。

尊氏は、（天皇）獲得の機会を失つた際、「將軍みづから万機の政を為給はん事も叶べからず、天下の事奈何（いかん）べきと案煩てぞ御座ける」と途方に暮れていたというが（巻十四「將軍御入洛事（附録）」）、後に、それは（天皇）が「武家に威を加」える、つまり権威を保証する存在（巻十九「光明院殿重祚御事」）であつたからという事が明らかにされている。語り手も（天皇）を獲得した事によつて、尊氏に「一理出来」（巻十六「將軍入洛事（附録）」）という見解を示している事から、尊氏の（天皇）観は政権創設のための機能としての（天皇）観だったのであり、それ故に（天皇）を欲していたという事が理解されよう。さらに、（天皇）と足利氏の關係では武家方が主導権を握つており、未だ（天皇）を獲得できず都落ちする時でさえも、「敗北したのは：私注 只高氏（タカウヂ）没空に朝敵たる故也、さらば何ともして持明院殿の院宣を申玉はて、天下を君と君との御争に成して、合戦を致ばやと思也」（巻十五「將軍都落事（附録）」）と考え、持明院統の皇族が後醍醐方に拉致されようとした際に、何とかして京に留まつた理由を、「尊氏卿に院宣を故院

成れし事なれば、御世務の事おほし欲放ざりけるにや、其上尊氏卿も内々申入らる、旨や有けん」と語り手は推測しているのである（巻十六「湊川合戦事（合戦）」）。「將軍より王位を令賜給たり」（巻十九「光明院殿重祚御事」）という記述は、『太平記』における尊氏と〈天皇〉との力関係を象徴しているよう。

一方の棟梁義貞の場合はどうか。義貞の一端さは先に述べたが、後醍醐（天皇）の義貞に対する態度を見ていくと、二人の互いに対する想いには温度差が認められるのである。例えば、鎌倉で反旗を翻した尊氏軍との合戦に及んだ義貞勢は、後醍醐（天皇）を守るために帰洛しようとしていたが、細川の攻撃を受け窮地に立たされていた。その時、後醍醐は「義貞・義助未被参先に、主上は山門へ令落給はんとて、三種神器を玉牀にそへて」逃げたという（巻十四「聖主都落事（都落）」）。危機脱出のためには仕方がなかったとしても、ここには〈天皇〉の義貞に対する心遣いは全く見られない。さらには、次のように、後醍醐は義貞を裏切り、自己弁護のために騙してさえているのである（巻十七「聖主還幸事（還幸）」）。

後醍醐から三種の神器を奪い、自らが戴く持明院統を名実ともに正統な存在にしようとした尊氏の策にはまり、後醍醐が義貞らには何も告げずに帰洛しようとした時の事である。〈天皇〉の帰洛直前、新田はこの情報をつかみ、家臣である堀口貞満を代表として涙ながらに責め立てた。それを聞いた後醍醐は涙を浮かべつつ次のように語ったという。要点のみ引用しておこう。

①貞満が朕を恨申つる所、一義謂あるに似たりといへども、尚

遠慮の不足にあたり

②只汝が一類を四海の鎮衛として、天下をおさめん事をこそ思食つるに、天運未至して、兵疲れ或廃ぬれば、尊氏に一旦和睦の儀をはかりて、暫く時をまたむが為に、還幸の由をば被仰つるなり、

③京都へ朕出なば、義貞却て朝敵の名を得つと覚る間、春宮に天子の位をゆづりて、同く北国へ下たてまつるべし、

後醍醐は、これは深慮の結果であると①で述べ、②でその内容を語っている。さらには、義貞が朝敵となることに配慮し、自らは位を引き退き、春宮に譲位し義貞に預けると語っている（③）。実際に、続く「義貞没落事」の冒頭に受禪の儀があった事が語られており、北国へ落ちた新田が「汝仮にも朝敵の名を執する事が然べからねば、春宮に位を奉譲て、万乗の政を任まひらすべし、義貞股肱の臣として、王業二たび本復する大功をいたせ」と仰下されて、三種神器を春宮に渡まひらせられし上は」（巻十七「瓜生判官心易事（心易）」）と、後醍醐の言葉を信じ、自らが三種の神器を帯した天皇を戴いていると認識していたのも当然の話であった。だが、義貞らは後醍醐に騙されていた事が次第に明らかとなる。

帰洛した後醍醐達は尊氏に幽閉され、還幸したことを嘆き後悔しており（巻十七「還幸供奉禁殺事」・巻十八「先帝吉野潛幸事」）、後に隙を見て這々の体で吉野に落ち延びている事から、まず、彼に深い謀などはなかった事が判明する。思えば、帰洛前に義貞達に言葉をかけた際、「例よりも殊に玉顔を令和」ていたのも、負い

目があつたからに違いない。彼は尊氏の甘い言葉に釣られて、半ばそれを信じ、義貞らを裏切つていたのである。その事は、皇位を春宮に実は譲つていなかった事で分かる。京都に還幸した後醍醐は偽神器を足利側に渡しているが、それは本物を春宮に譲つたからではなかつた。吉野潜幸時に自身が三種の神器を所持しており、それを神が加護した事が語られているし、北国に神器があつたとも語られていない。本物の神器は後醍醐が所持していたと判じてよからう。しかも、受禪されたはずの春宮は、以降も一貫して「春宮」と称されている。後醍醐は自分の復権のみを考えていたのであり、義貞の事などは考えていなかったのだ。一方、へ天皇へに裏切られた義貞は君の代の到来を祈願し、「朝敵」の身となつて北国へと落ちていった。

源氏の棟梁義貞にとつて、へ天皇は守護すべき存在であり、「天下の武将」の身を保証してくれる存在だった。「天下の武将」義貞は尊氏に比肩し得る存在でいられたのである。だが、後醍醐の權威が失墜して以降は、義貞は足利氏の庶流である斯波高経と同様「源氏一流の統領」（巻十九「新田義貞落越前府事」）と並び称されるようになる。もはやへ天皇の保証を得た源氏の棟梁尊氏の敵ではなくなつてしまつたわけである。その現実を知らない義貞軍の兵が「誠に將軍の天下を奪する人は必義貞なるべし」（巻二十「水練栗毛付難事」）と述べているが、これは直後に語られる彼の大死を際立たせる作者の構想によるものだろう。義貞は後醍醐に騙された事を知らないまま、危機打開のために発せられたにすぎない宸筆の勅書に喜び、それを「膚の守」として死んで

いったという（巻二十「洗義貞首見事」）。義貞は最期まで後醍醐へ天皇へに振り回されたのであつた。

このへ天皇と二人の棟梁の關係の違いが生じた要因は何か。作者の構想の問題と絡めつつ、最後にまとめたい。

五、おわりに

冒頭で触れたように、「太平記」はその生成の初期段階において、足利氏の管理下にあつた事が『難太平記』の記事から窺える。現在では、これに基づき、「太平記」は何段階かの書き継ぎを経て現存の姿となつたと考えられている。初期形態本の具体的内容を伝える資料が皆無であり、現存本を相対化する資料すらない現段階においては、その姿を復元する術はない。だが、現存本に初期足利政權の思惑が組み込まれているのか否かについての検討から、直義が関わつた「太平記」の姿をある程度推定する事は可能なのではないか。その格好の材料が、創られた棟梁義貞像と尊氏との対立の物語にあると考えるのである。

もし、二人の争いを描くだけならば、義貞も尊氏と同じ目的を持った人物としてもよかつたはずである。むしろ、そちらの方が武家の棟梁の地位を争う物語としては分かり易かつたのではないか。しかし、『太平記』では、義貞は後醍醐の代を守る存在として終始描かれている。それは、へ天皇と一体化させる事で、尊氏とへ天皇の抗争の矢面に彼を立たせようとする構想と無縁ではあるまい。東寺合戦（巻十七）において、乱の原因は尊氏と義貞の二人にあると互いに語っているが、少なくとも尊氏にとつて

はそれは名目にすぎなかったようだ。「叛逆ヲ企ニ其辭無ケレバ、義貞ヲ以テ今敵ト称ス」(巻十七「山門陳南都事」)という山門の牒状の一節は的を射たものといえる。尊氏にとって重要だったのは「天皇」との関係の方で、その証拠に、持明院統「天皇」の保証を得てからの尊氏は、後醍醐を欺き、自ら義貞を討とうとする意志を見せなくなってしまうているのである⁽²⁾。

このように、棟梁権の抗争譚は、足利政権確立過程を語る上で將軍家の朝敵化という暗部を隠そうとする機能を有しているのであるが、この物語の役割はそれに留まるものではあるまい。有力な武家の棟梁の有資格者の討伐は、足利將軍家の權威を示す効果を生んだはずなのである。新田の權威をあえて強調した、二人の棟梁の物語創出の理由はまさにここにある。この物語は足利政権にとっての暗部を隠蔽しつつその權威を知らしめるといふ、極めて政治的な性質を帯びたものと考えられるのである。

足利氏の検閲下で成った初期形態本が足利政権の確立を物語るものであったとしたら、現存本に伝えられる二人の棟梁権をめぐる物語の基本型は、初期本にあった可能性が十分にある。現存本の第二部世界には、初期形態本の名残が色濃く残っていると考えるのである。

注(1) 長谷川端氏「第二部の世界」(『太平記の研究』汲古書院、82・3

所収。初出は66・5)、中西達治氏「第二部の構想について」(『太平記論序説』桜風社、85・3所収。初出は65・6)等参照。

(2) 鈴木登美恵氏「太平記に於ける新田氏」(『国文』第九号。57・

5)、海津一朗氏「楠木正成と悪党——南北朝時代を読みなおす」(ちくま新書、99・1)「北陸朝廷頼末——新田義貞」等参照。

(3) 和田琢磨「『太平記』の変貌——『明德記』の主題確認を端緒として」(『日本文学』03・12)に、直義が検閲し目指した「『太平記』(初期形態本)についての私見を述べている。初期形態本は天龍寺供養の記事を大尾に置いた、「明德記」に通ずる足利氏の權威確立の物語であつたと考えている。本稿では、この見通しを踏まえて論を進める。

(4) 「天皇」の定義は以下の通り。「天皇」は実際に位に就いている天皇のみを指すものではない。足利將軍など武家政権の為政者の立場を保証する皇族を包括したものである。和田「『太平記』における「天皇」と足利將軍——『明德記』「応永記」を視野に入れた——」(『古典遺産』53、03・9)参照。

(5) 大森北義氏「建武の内乱」の歴史叙述と構想」(『太平記の構想と方法』明治書院、88・3所収、中西氏「新田義貞」(『太平記論序説』所収。初出は80・6)等参照。

(6) 詳細は注(4)の拙稿を参照されたい。

(7) 鈴木氏注(2)論文、中西氏注(5)論文等参照。

(8) 鈴木氏は注(2)の論文で、作者の新田に対する好意的筆致から、原「『太平記』(初期形態本)」は「新田氏が足利氏を滅すといふ期待が未だ残されてる時期」に成立したかと推測している。これは私の見解と異なるものである。注(3)の拙稿を参照されたい。

(9) 武田昌憲氏「『難太平記』の世界」(長谷川氏編「『太平記の成立』汲古書院、98・3)等参照。

(10) 森茂暁氏「大塔宮護良親王令旨について」(小川信氏編「中世古文書の世界」吉川弘文館、91・3所収)参照。なお、「『太平記秘伝理尽鈔』巻第七には、「宮、新田殿への令旨を繪旨の文章に遊ばされし事。無礼にも侍んやとなり」と、この問題への言及がある。

(11) 森氏は「皇子たちの南北朝」(中公新書、88・7)の35・40頁において大塔宮の令旨について言及しているが、「『太平記』のこの不

審な令旨について「おそらく新田義貞の転身を説明するための『太平記』の小細工」と推測した上で、歴史学的には、当時の大塔宮の権勢からすれば、「たとえ護良が繪旨を出したとしても、少しもおかしくないという客観的状况」があったとし、後に起こる大塔宮失脚の原因の一端の表れではないかと述べている。私が目指しているのは、いうまでもなく「小細工」の解明である。

- (12) 鈴木氏「『太平記』と謀略旨」（鑑賞日本の古典13『太平記』尚学図書、80・6）参照。特に注記のない限り、以下の鈴木氏の論は全てこれによる。

- (13) 鈴木氏の他には、杉本圭三郎氏「『太平記』叙述の主体——護良親王をめぐる——」（長谷川氏編『太平記とその周辺』新典社、94・4）、大森氏「『太平記』における護良親王」（『軍記と語り物』32、96・3）、中西氏「元弘の変前史と大塔宮——『太平記』の歴史認識について——」（『太平記の論』おうふう、97・10。初出は94・3）等がある。

- (14) 先学の殆どは、『太平記』のこの不審な令旨を大塔宮側の問題から論じている。

- (15) 中西氏もこの点に作者の意図を指摘している（注5）。なお、諸本間の異同は「参考『太平記』」によって概観する事が可能であるが、管見の限りでは、神宮徴古館本の日付は他の殆どの諸本と同じであ

る。

- (16) 巻九「足利殿御上洛事」「六波羅要害事」巻十五「多々良浜合戦事」付高麗河守具事等。

- (17) 注（4）の拙稿および、和田「『太平記』における功績者尊氏像の形象法——奏状の論理をめぐる——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四八輯、03・2）参照。

- (18) 注（17）「『太平記』における功績者尊氏像の形象法——奏状の論理をめぐる——」参照。

- (19) 今井正之助氏「護良親王逮捕事件と驪姫説話——『太平記』における説話の意味——」（『軍記と語り物』13、76・12）等参照。

- (20) 鈴木氏は「『太平記』の文芸意識」（『解釈と鑑賞』88・12）の中で、「『太平記』作者が「大塔宮から新田義貞へ、構想の中心となる主役の交替を果たした」と指摘している。

- (21) 注（5）の中西氏の論文参照。
- (22) 詳細は、注（3）の拙稿を参照されたい。

〔付記〕「『太平記』本文は神宮徴古館本（和泉書院、94・2）による。本文の校訂も同書によった。なお、引用に際し、濁点を付し漢文を読み下すなど、読みやすくするために私に表記を改めたところがある。また、『太平記秘伝理尽抄』は東洋文庫72によった。